

山口県公立大学法人評価委員会（第48回）の審議要旨

- 1 日 時 令和6年7月16日（火） 9：00～10：30
- 2 場 所 山口県立大学北キャンパス1号館4階 A401大会議室
- 3 出席委員 野崎委員長、小野委員、首藤委員、早川委員（委員長以外50音順）
- 4 審議事項 第3期中期目標に係る法人の業務の実績に関する評価について
- 5 審議要旨 [● 委員 ◆ 委員長 □ 法人 △事務局]

第3期中期目標に係る法人の業務の実績に関する評価について

- 県内生割合及び県内就職率について、いろいろと努力をされ、改善点もお聞かせいただいたが、第3期中期目標の評価は、あくまでも目標数値、それに対してどうという評価なのかという視点が必要である。
- 「入学者に占める県内生割合の向上（No. 26）」について、令和5年度に46.5%という実績が出ており、期間内での最高の数字ではあるが、目標を60%と掲げている限りは、資料7の「評価の基準及びその判断の目安」に沿って評価すると、「3」というのはちょっと甘いんじゃないかなというふうな気がしている。
- 「卒業生の県内定着の促進（No. 27）」について、県内就職率50%という目標に対して、自己評価の「3」は、高い評価になっている気がしている。
- 「入学者に占める県内生割合の向上」及び「卒業生の県内定着の促進」は、重点的に頑張らなければならないところでもあるので、「2」という評価でどうだろうかと考えている。
- ◆ 「入学者に占める県内生割合の向上」及び「卒業生の県内定着の促進」は、数値目標としては「3」を付けるほどには到達していないということで、自己評価では、多分他の取組等も踏まえて、評価をされているのではないかなというふうに感じているが、そのあたりのことはどうか。
- 「入学者に占める県内生割合の向上」については、60%以上というのが目標であるが、これを達成することは、非常に難しい目標となっている。県立大学だからこその高い目標であって、他の公立大学が20%程度という状況の中、県立大学は

頑張ったと考えている。また、山口県の大学進学率が全国47位という中で、教員は高校訪問など精力的に頑張っており、第3期の反省の上で、第4期に取り組んでいる。

- 教職員は、県立大学の教職員であることに誇りを持って頑張っており、数値目標の結果では明らかに「2」だが、今後もっと頑張っていく考えであり、「3」の評価をお願いしたい。
- 各学科の就職割合を見ると、国際文化学科の県内就職割合がすごく下がっているように見てとれた。以前から英文系学科は必要なのかと思っているが、県内に就職してもらうための学科を作るべきではないだろうか。この辺りについてはどう考えているのか。また、県立大学の目標に対して、県内就職割合が落ちている部分のご説明をお願いしたい。
- 県内よりも県外からの進学者が多いため、60%近くの学生が県外就職となる可能性が高い。卒業生の県内就職を考えると、入学生は県内からの進学生の確保を優先するっていうことをやらなきゃいけないし、そのような入学制度にもしているが、一般入試もある中、県内からの進学者が県外からの進学者を上回る結果にはでてこない。これが現実なので、附属高校を設置することにしたり、高大連携を強化したりすることで、県内の進学生が増えると、県内就職も改善されるのではないかなと考えている。国際文化学部は山口県に必要な学部として生まれ変わる。
- 国際文化学科は、国際文化学部では、「デジつよ文系」を育成するということで、「情報社会学科」を新設する予定であるが、世界はグローバルで動いており、グローバルに考えられる人間も必要であると考えていることから、そうした資質のある学生を育てていくということは、山口県にとっても必要なのではないかと考えている。
- ◆ 県内就職割合に係る評価については、実績の数値だけを見ると、確かに委員の言われるようなところもあるが、「県大見本市」など非常に素晴らしい取組をされているので、その辺りも踏まえた評価書の書き方をしてはどうだろうか。
- ◆ 国際文化学部において、グローバルなマインドを、地方だからこそ入れておかなければならないが、これをどう地域に落としていくのかということが課題だと思うので、今後、そのようなことを考えていただきたい。
- ◆ 「情報社会学科」については、県立大学と山口大学が一緒に取り組んでいるところであり、私から見ても期待している。山口県に足りないものを補っていくリソースになると思うので、是非頑張ってください。

- ◆ 「専門的外国語運用能力の育成（NO. 7）」について、第3期の途中で色々な取組が始められているが、学年進行を考えると、こうした取組を評価するには、その対象となる学生が出す成果としては、実際には令和5年度のところだけになるのか。その点、御説明をお願いしたい。
- この取組については、第3期が始まってから色々な取組を行ってきたことから、卒業までに指標を達成する学生の割合は、取組結果がしっかり現れてくるのは確かに令和3年度以降になるのかなと考えている。また、令和5年度以前の達成率については、令和3年度は143%、令和4年度は達成率が108%。令和5年度は133%となっており、最終年度だけ見ると「5」の評価、令和4年度と令和5年度を平均しても、また、令和3年度から令和5年度の平均をとっても、120%以上の達成率となっていることから、「5」の評価としている。
- ◆ 「地域で活躍できる看護職の育成（NO. 13）」について、ディプロマ・ポリシーの達成度が挙げられているが、これはどのように自己評価しているのか。学生のアンケート調査、いわゆる間接評価をされているということか。
- 卒業後1年の時点でアンケート調査をしている。大学教育が現在の仕事や自分に役に立っているかと聞いたところ94.5%が役に立っているとか、カリキュラムの満足度が93.6%とか、満足していただいている評価を得ている。
- ◆ 学生本人だけじゃなくて、例えば教員に対する学生のディプロマ・ポリシーの達成とか、或いは、就職先に卒業生の評価をしてもらっているといったものはされていないのか。
- 本学はアセスメントプランにもとづいてDP（ディプロマ・ポリシー）達成度を測る仕組みを整備している。その中で、看護学科は5学科の中で一番進んでおり、複数の指標を使って分析している。コンピテンシー評価や民間テストなどの客観的な指標や、自己評価などの主観的指標を含めた複数の視点から、ディプロマ・ポリシーの達成度を学科として分析し、学生に丁寧にフィードバックしている。
- 「適切な予算編成及び予算執行の合理化の推進（NO. 42）」について、第3期の6年間の取組実績を見てみると、物価上昇など、どうしても抑えきれない費用があるのだろうが、予算が膨らんできているのはどうだろうか。評価は「4」となるのはどうだろうか。
- 評点「4」が適当かどうかについては、確かに比率自体は上がっているが、10%前後の比率が高いかどうかということは明確な基準がなく、また、ペーパーレス化など、全学一斉休業等により、物価高の中でも、コスト削減に徹底して取り組んできたというところをもって、「4」という評価をさせていただいている。

- 「令和5年度財務諸表」の貸借対照表（資料4）に未収学生納付金収入が計上されているが、昨年度はなかったように思う。内容を説明していただきたい。
- 未収学生納付金については、授業料の減免（3分の2）を受けている1名の学生が未納となっていたことによるものだが、本年4月のうちに入金があり、未収状況は解消している。
- ◆ 「論文等発表活動の質の向上（NO. 23）」については、学術水準の向上を目指して、学術研究推進共同体を発足させて、9人のメンバーで20本、素晴らしい取組をやっているが、これに関わっていない教員にどのような効果を与えているのかをお聞きしたい。掲載論文の数や、「科研費等外部資金申請の促進及び研究の質の向上（NO. 24）」についても、いろんな参考値を表にまとめておられ、各年度の平均値、教員1人当たりの本数とかも出ているが、例えば、平均値とかではなくて、メディアなどが評価をしたら全然変わるような評価になっているということではないか。また、科研費については、教員1人当たりの申請数がすごく低く見えているが、これは申請を一件もしていない先生方が、結構おられるということではないのか。
- 採択されている申請は45%ある。採択されていない人が申請を行い、継続的に研究をしている者は申請をしないので、申請人数は少なくなっていく傾向にある。本学では、研究を持っている教員は、公立大学としては30%程度であるのに対して、本学では、45%と非常に高い結果となっている。
- 学術研究推進共同体に関わっていない教員への影響について、この共同体の活動は、メンバーの生産性の向上のため、学内の予算を使わせてもらって、学内への影響ということでも活動している。具体的には、共同体のメンバーが企画した研究関係のファカルティ・ディベロップメントを年6、7回、学内或いは学外に公開している。その効果の間接的な影響として、他の教員の論文数や科研費の採択にも関わっていると考えている。また、この共同体のメンバーが、科研費の学内申請時のレビュー、助言ということも併せて行っていることが、科研費の継続性につながっていると考えている。
- この共同体で出てきている論文というのは、それ相応の外的評価もある論文となっている。また、若手等々のメンバーには、背中を押してあげるとよいような方にもメンバーに入ってもらっているので、周りの他の教員への研究に対する意識の浸透、共同体に入ったら頑張らないといけないという覚悟を持ってもらう仕組みということで機能していると考えている。
- 「県民の健康増進・文化振興に関する学習機会の提供（NO. 29）」について、

サテライトカレッジなどで各市町を回られて大変だったと思う。県民に参加いただくというところで、取組が充実してきていることから、今後は参加者数も増やしていくことが大切なのではないだろうかと思う。参加いただくという意味においては、人数を増やしていってもらいたいというところがあるので、評価としては「4」で十分だと思う。

- できるだけ県民に参加してほしいというのはとても重要なことというふうに思っている。全市町で実施するために、学内の教職員が頑張ってくれたところである。評価を「4」にして、もうちょっと頑張るということもあると思うが、再び「5」を取りたいと思って頑張るということもあると思う。
- 大学の本務と高等教育機関としての地域貢献に取り組むことは、教員の疲弊という観点からは、非常にせめぎ合いがある。とにかく回数とエリアを押さえれば、良いみたいなのところがあったように思うので、もう少しクオリティとか、人が呼べる内容とか、そういったところで、質の面で変えてみる、工夫をする必要があるとご意見を聞いて思った。
- 実際に各市町に行っている教員からは、もう少し県立大学のアピールがしたい、そうすると、モチベーションになる、と言われる方もいる。県立大学に来た学生の家庭に対してこちらからアピールして、参加者を増やすということをやろうという話をしている。開催数は少なくともたくさん来ていただければ、それだけ多くの県民に貢献することになるので、参加者数ということも見ていきたいと思う。ありがとうございました。
- ◆ 非常によく理解できるところがあって、共感した。特に内容、質の面で、今後はやはりいろいろと考えていかないといけないと思う。当然、社会が求めているものとのバランスとか、いろいろあろうかと思うので、是非、そこは今後期待させていただきたいと思う。
- 「学生・教職員と地域住民が触れ合うことのできる地域交流施設の運営と活用（N O. 31）」について、「4」の評価がついているが、ここは、年間50回以上という数値目標に対して、目標を大きく上回っており、確かにコロナ禍で取組が落ちている時期はあったようだけれども、「5」を付けても良いと思う。
- 最初の話に戻ってもうこれ以上言わないけれども、目標の達成指標として、きちんと数値目標の数字が出ている限りにおいては、やはり、私はその数字にしっかり従った評価をすべきだと思う。したがって、県内生割合が60%以上という目標が、難しい目標であったと言うのであれば、そのように説明されれば良いのではないかなと思うので、私は「2」付けることに躊躇される必要はないと考えている。

◆ 「適切な予算編成及び予算執行の合理化の推進（NO. 42）」について、管理的な経費が令和4年度、5年度でちょっと増えているが、これは何か特別な事情があったのだろうか。

□ 県立大学では、いろいろと積極的に経費の削減に取り組んできたが、やはり、光熱水費を始めとした物価高騰が、この3年間ぐらいで一気に上がってきているところが外的な要因として影響している。

◆ 防ぎようがないような状況だということで、分かりました。

【 まとめ 】

◆ 各委員から多くの御意見をいただいたところであり、審議事項については次回への継続審議とする。

△ 今後、事務局において委員の意見を踏まえて評価書の素案を作成し、次回の評価委員会で審議をお願いしたいと考えているので、各委員の御協力をお願いします。

以 上